大胆な生活

井上光晴

大胆な生活

井上光晴

岩波書店

大胆な生活

一九八六年五月三〇日　第一刷発行©
一九八六年七月二五日　第二刷発行

定価一四〇〇円

著者　井上光晴（いのうえ みつはる）
発行者　緑川亨
発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社　岩波書店
電話 〇三(二六二)四一一一
振替 東京 六-二六二四
印刷・精興社　製本・牧製本

Printed in Japan
ISBN4-00-001267-3

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

椅　子……1
山梔子夫人……13
本日のスケジュール……25
小打温泉……39
目の夕陽……51
大胆な生活……63
空……75
小さな自由の三月……87
レインコート……99
上品な面接者……111

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まひるの宴……125
伊万次の場合……137
バッテリー食堂始末……149
船長の電話番号……163
市民プール……175
東シナ海の燕……187
フタバ理髪館……199
節操の問題……211
くろかみ……223
地下庭園……235

椅　子

1

犬猫病院の所在を示す看板のでた道角に、水江が立ち止まったので、彼は電柱の蔭に首をすくめた。毎週土曜の午後、市ヶ谷の鍼灸治療に通うという外出の口実が嘘だというのは、原宿駅をでて五分という現在の場所からでもすでに判明している。昨夜、晩飯を食べたあと、何気なく彼は触れてみた。

「明日も市ヶ谷に行くのかい」

「そのつもりよ。予約を取ってるから、休むわけにはいかないでしょう」
「七月の末からだろう。まるまる三ヵ月、休みなしか」
「そういう治療の方法だから、一回でも休むとそれまでの効果がなくなってしまうらしいのよ」
これで決まりだと、彼は思った。一回どころか、九月に入って水江はまるっきり佐々鍼灸院に顔を見せていない。
なだらかなコンクリートの坂道にきて、自然に足どりを早めた水江の後をつけながら、六十七歳の女が男を作るのかと、彼は熱い息を吐くように舌打ちする。所帯をもってほぼ四十五年間、出征とシベリヤ抑留にまたがる七年の空白を間に挟んでも、殆どの人生をともにおくってきた彼を、一体どんな理由をつけて裏切ろうというのか。
十年前の夏、伊豆の下田に泊った折り、かなりの諍いをしたことはあったが、それとてもたかだか一夜の出来事に過ぎなかった。二人しての「観光旅行」は初めてだという思い入れもあったが、まったく期待したものと

かけ離れた町のたたずまいと、ホテルの扱いが対立の原因となったのである。

「食べないの、もう」

「ちょっとひどすぎるね、これは。栄螺の壺焼きなんて代物じゃないよ。殻と身が全然別だろう。昨日か一昨日、焼いた奴をさ、切り刻んで別の殻に移したんじゃないのか。鮪だってそうだよ。水っぽいもの。これだったら場末のすしでもつまんだ方がよっぽどましだよ」

「こういう形式のホテルだから、仕方がないのかもしれないわね」

「海の傍にきて、水臭い魚をだされるなんて思わなかったな。食欲も何もあったものじゃない。……これならまだ修善寺にでも行った方がよかった」

「海を見たいといったのはあなたよ。あたしは何処でもよかったのだから」

「何処でもいいってことはないだろう。伊豆に行きたいといったのはおま

えだよ。伊豆を抜かして考えるんなら、鬼怒川や川治だって、そういう組み方だってできたわけだからね」

「鍋の火、もうひとつ貰ってきましょうか。これじゃいくらも熱くならないわ。何というのかしら、これ」

「食べなきゃいいんだよ」

「食べないってわけにもいかないでしょう。熱くすれば、何とかいけるわよ。あたし、そういって貰ってくる」

「やめろよ。いっそ全部残しておいた方がいいんだ。こんなふうな食事で通用するなんて思う奴につきつけてやるんだよ」

「何とも感じないわよ。相手は使用人なんだから。……」

固型燃料の追加を頼みに立ち上がろうとする水江を、彼は制した。

「やめろといってるだろう。こんな蠟燭みたいな蝦、どっちみち食えないよ」

「何か食べなきゃ、一晩中お腹すかしてるわけにはいかないわ。つむじを

まげるのはわかるけど、こういうものだと思えばいいのよ。折角、お金払ってるんだから、食べられるものを食べましょ」

その瞬間、猛烈な怒りがこみあげてきて、彼は割箸を水江に投げつけてしまったのだ。

横断歩道を渡り、靴屋の店先をかすめるような恰好で歩くと、水江は軒先にステンドグラスをはめ込んだ小さな喫茶店のドアを押した。そうか、此処が男と逢引する場所というわけか。午後一時二十二分。恐らく八分ばかり早く来過ぎたのだろう。

彼は一旦スパゲッティの店まで引返し、レインコートの襟を立ててステンドグラスの前をそれとなくぶらついてみた。確かに子供はいない。生れなかった。だからといって七十にもなった自分がこのような理不尽な嵐に見舞われてよいのか。四、五日前の夜、旅芝居の一座を素材にした連続物語をテレビで見ながら、水江の口にした言葉が唐突に甦る。

「あたしが青山師範に入っていなかったら、あたしたちの人生は、随分違

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

っていたでしょうね」
「それはそうだろうな。お互い、違う相手と一緒になってるわけだから」
「この座長ね、ほら、ここで喋ってる女形がいるでしょう」水江はブラウン管を指差した。「この人は北大の農学部をでて山林の調査官みたいなことをやっていたのよ」
「役者の経歴がそうだというのかい」
「そうなの、この人よ」
「実際の役者がそうなの。それともテレビの筋書がそうなってるわけ」
「ああそうか。実際とテレビとどちらも役者だから、まぎらわしいわね。あたしがいってるのは、テレビのお話の方。テレビの話がそうなってるのよ。北大をでて、山奥ばかり歩いてるうちに、アイヌの生活に触れるのね。娘とも仲良くなるんだけども、家でも勤めている役所の方でも、二人の恋愛を認めないし、そうこうするうちに娘は病死してしまう。そしたら何もかも捨てて、どさ廻りの一座に入って、役者になるの。喜劇専門の女形な

んて、おもしろいでしょう」
「凝ってるんだね、筋書が」彼はいった。「ドタバタの喜劇かと思ってた」
「今日の分は何だか、今いち乗っていないみたいだけど、すごくどきっとする話。……青山師範に行かずに、日赤の養成所の方へ進んでいたら、あなたとも会わなかったわけだし、どういうことになっていたのかなあって、さっきふっとそう考えていたの」
「軍医に見染められて、今頃は何処かの病院長夫人というところかな」
「戦死していたかもしれないわね」
「戦死はしないさ」
「どうして」
「どうしてということはないけど、なんとなくそんな気がするな。軍医の線が駄目なら、それこそテレビあたりになってるかもしれないよ」
「テレビって、どういう意味」
「……」

「ねえ、どういう意味なの」
「裏切りの街角」
「なんだか、よくわかんないわね」
午後一時三十分からかっきり・時間。彼はステンドグラスをはっきり見通すことのできる場所にいた。その間、客の出入りは数えるほどしかなく、さらに三十分ほど待ったが、水江も、相手と思われる客もでてこなかった。
彼はついに意を決して、〈バードウォッチング〉と表記されたドアを押した。ところがそれらしき姿が見えないのだ。二組のアベックは、見ただけで別人だったし、他にきざな背広を着た男がひとり坐っているきりであった。カウンター席の他に、六つの椅子席を並べた狭い店内なので、それ以上探りようもない。
「いらっしゃいませ」
「あのう、この店、別の出口がありますか」
「いいえ」

「一時間ばかり前だけど……いや、もっと前になるかな。此処に入ってきた客で、あたし位の年配の人がいたと思うんだが、知りませんか」
若いウエートレスが怪訝な顔を、カウンターに向けた。
「女性ですか」
「そう、女だ」彼はカウンターの声に答えた。
「石島さんじゃないの、それなら」背の高い青年はいった。「あれ、喋っちゃってよかったのかな」
「危害を加えるわけじゃないから」
咄嗟に彼がそういうと、青年はうふっと声をだした。
「それで、石島という人、何処に消えたんですか」
何かいいかけようとするウエートレスに、青年が目顔で合図した。
「石島さんにご用だったんですか」
「用というわけじゃないんだけど、此処にくれば会えるといわれたんでね」

「へえ、ファンができちゃったのかしら、もう」まるい目のウエートレスが弾む声をだした。

「こういうのって、早耳なんだよなあ」青年はいった。「そういう噂でもきいたんですか、お客さん」

「噂ってどういうこと」

「とぼけちゃって」カウンターの青年はいう。「着換えてる場所だって、石島水江の素顔を見られるのは〈バードウォッチング〉だって、吹込まれたに違いないんだから」

「水江さんに会うの、どうすればいいのかな」

「会えるわよ、サリーに行けば。今の時間だったら」

「サリーって……」

「個人的に会いたいっていうんじゃないの、お客さん」青年はいう。「きいてみなくちゃわかんないけど、無理かもしんないよ、それは……」

何をどんなふうに判断すべきかわからなくなったので、彼は黙っていた。

「素顔を見せるの、あんまり好きじゃないらしいよ」青年はまたも目顔で、何かをウエートレスに伝えた。「でもさ、どうしてもっていうなら、頼んであげてもいいですよ」

「サリーっていうの、場所を教えてくれませんか。……」ウエートレスの固くなった表情をみて、彼はいい繕った。「ごたごたしてるものだから、方角がわかんなくなってしまったんだ」

註文をしない代りにといって、彼が千円札を握らせると、ウエートレスは伝票の裏にわざわざ道順を書いてくれた。そして、一分も歩かぬ距離に、〈サリーと蘭〉名称のブティックはあったのだ。

人だかりのするウィンドーに顔を近づけようとして、彼は横合いの少女から嫌というほど脇腹を肘で押された。

「駄目よ、勝手に割り込んじゃ。……」

「あそこの椅子に坐ってるの、人形じゃないよな」

「田舎っぺいなの、おじさん。それとも、わざと。……」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com